



横山 禎徳
(よこやま よしのり)

1942年生。東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム (EMP) 企画・推進責任者。2011年より東京電力福島原子力発電所事故調査委員会委員。

原子力科学、生命科学、情報科学など、最先端の現場にこそ、科学の知だけなく、しっかりした思想や哲学が

それは「基本理念、果たすべき使命、行動指針」の三層構造である。すなわち、現在のようないくつかの行動指針を有するだけでは不十分で、組織として全体を統括する思

横山氏は、過去の時代にもまして、現代社会には思想あるいは哲学が必要になっているという。たとえば東京電力福島原子力発電所事故調査委員会の報告書(五九〇頁)に、横山氏の委員としての思いが書かれているが、その中心は原子炉を守るのではなく、「人のいのちを

「トランスサイエンス」という言葉がある。科学が問いを発することができるが、科学のみが答えることのできない領域をいう。3・11以降、現代社会はトランスサイエンスの方向に転換する必要がある。先の事故調の例のように、原子力科学、生命

課題克服への三層構造

組織改革は、単に組織を変えるだけでなく、人の意識や行動を変えるものではない。組織が変わっても、人の行動が変わらなかつたら、それは組織を変えたことにならない。本願寺派のような理念追求型の組織には、それなりの必要な枠組みがあるという。

提言 1

現代社会における思想、哲学の重要性と宗門の責務

「守る」という思想・哲学から発想すべきだということであった。氏は被災者、放射線の被害を受けた人たちの、その後の生活などの調査を担当したが、全面的に表現を被災者の視点に書き変えられたという。それまで、報告書ではそのような考えがもたれていなかったのである。

トランスサイエンス

必要になっているという。そして氏は、これらの社会的要望に対して、浄土真宗は向き合ってきたのかと問う。最先端の宇宙観とか人間観に関係することに對して、仏教はしっかりと向き合いどう考えるのか示すべきだということである。このように、氏は宗門に、まず現代社会に向き合い、普遍的な思想を提示することを求められた。

宗門教学会議 News Letter

公共をめぐる対話——宗教と公共、浄土真宗と公共——

二〇一二年十月二十日。「宗門の教学伝道態勢の確立」を目的とする第一回の宗門教学会議が、本願寺伝道院において開催された。

ご門主さまご臨席のもと、様々な組織デザインを指揮してきた横山禎徳氏(東京大学EMP)、現代宗教事情に精通する島蘭進氏(東京大学教授)、公共哲学を推進してきた金泰昌氏(京都フォーラム)の三氏と、宗門からは徳永一道勸学寮頭が出席し、多岐にわたる議論が三時間あまりにわたって展開された。

有識者諸氏からは、それぞれの分野から貴重な提言がなされた。テーマの中心となったのは「公共」。

そもそも、「公共する」とは、いかなることを意味するのか。宗門は、いかなる組織をデザインし、公共性を開いていくべきなのか。宗門の教学は、いかにして公共化していくのか。宗門の社会的活動を、どのように公共から表現・説明しうるのか。非公共的であることの背景には、どのような歴史的な経緯があるのか。

宗門にとって、極めて重要な課題が「公共」をキーワードとして、論じられた。本稿では、有識者のご意見を研究員が報告紹介するものである。実際の議論は、近々に書籍として発行される予定である。



目次

第1回宗門教学会議

概説	10
〈提言1〉 横山 禎徳氏	11
〈提言2〉 島 蘭 進氏	12
〈提言3〉 金 泰 昌氏	13
〈提言4〉 徳永一道氏	14

想と、今の時代に果たすべき使命とが明確にならなければならないという。全体を統括する思想とは数百年から千年以上持つもの、果たすべき使命というものは、数十年から百年ぐらい、行動指針は毎日

提言 2

社会倫理思想としての仏教

島蘭氏は、「正法」をキーワードとして、日本仏教の社会倫理思想を再構築するべきであると提言された。

島蘭氏は、現在、東日本大震災への支援において、仏教教団が非常に大きな働きをしているにもかかわらず、その社会倫理実践の論理が明らかになっていないとの問題点を指摘する。

島蘭氏によれば、「正法」とは、釈尊以来の正統を継承している真理・規範であると同時に、戒律を守る清浄なサンガ（僧伽）によって社会全体に作用され

問題提起された。

島蘭氏は、現在は、世界の仏教が総体として一つの役割を担うべき時代であり、仏教共通の社会思想を考える上で、日本仏教が独特の展開の中で培ってきたものによって貢献するべきだと指摘する。その一つとして、伝統的な「正法」理念にもとづいて戒律の意味を問い直すような仏教倫理の再構築が必要であるとされる。

そしてもう一方では、真宗独自の正法観の構築、すなわち、釈尊の教法は形だけ残っているものの、行も証（悟り）もないという「末法」の時代を強く意識することにより戒律を捨てた真宗において、戒律によって成り立つとされる「正法」を脱構築して、思想的に練り上げていく教学が必要であると述べられる。

そして最後に、「仏法」というものは、一人一人の悟りであると同時に、法と社会全体の幸福に通じる学問であるということ」が自覚され、「いろいろな経験をしながら思想資源を生んできた」真宗に

のことに對するものとなる。宗門のような組織はこの三層構造に基づく構造的な対応が必要で、それを全体へ浸透させなければならぬ。

このように氏は、長期的視野と思想で

るべき真理・規範でもある。氏は「正法」の理念に基づきサンガの存在が、社会全体に平安をもたらし、人々の幸せに貢献したと指摘し、仏教は、本来的にこの「正法」に象徴されるような社会的使命を持つていと論じた。

日本の宗派仏教以前の奈良時代の仏教をみると、護国経典たる『金光明経』の占める位置から、仏法が社会全体の幸福に資するという「正法」理念がいかに重要視されていたかがうかがうことができる。しかし、戦後、国家と仏教の結び

島蘭進

(しまざの すずむ)

1948年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は宗教学、宗教社会学、近現代日本宗教史、近現代宗教理論。



創造的に運用するための技術科学や、評価対策など、方法論をきちつと学び徹底するということが、組織としての本願寺派の喫緊の課題と述べられた。

(報告担当・坂原)

は、世界の様々な宗教者や思想を持つ人々が耳をかたむけるに値すると思える

提言 3

「トランスバース」の提唱

金氏はまず、普遍性を考えるための鍵概念として、ユニバース、マルチバース、トランスバースという三つを提示された。金氏によると、普遍性を指す概念として、ユニバースはもはや妥当ではない

思想を発信していくことが求められていると論じられた。

(報告担当・八橋)

という。なぜなら、現代の世界的趨勢は多元的な価値が共存するマルチバース(多元的宇宙)であり、そのような状況で重要なのは、その多元的な状況を横断的に媒介するトランスバース(領域横断)であるからだ。ユニバースは一つの普遍的な価値観が存在するという宇宙観であるため、多元的な価値をむしろ一元的な価値へと収斂させようとしてしまう。それゆえ、ユニバースは多元的な現代社会においては、抑圧として機能してしまうのだ。このような抑圧を避けつつ、人



金泰昌

(キム テチャン)

1934年生まれ。公共哲学共働研究所長。専門は、公共哲学、政治・社会哲学・比較文明・文化論、将来世代研究。

びとが媒介されつながらあうことが可能な宇宙観として、トランスバースを金氏は提唱している。金氏によれば、



徳永 一道

(とくなが いちどう)

1941年生まれ。本願寺派勸学寮頭。京都女子大学名誉教授。大阪府八尾市正福寺住職。専門は真宗学。

教学の「公共化」について、氏は三十七年間にわたって従事してきた聖典の英訳事業、また長年の間教鞭をとってきた京都

このようなトランスバーサリティ（領域横断性）を実現するためには、これまでエリートや為政者たちが唱えてきた「ために」の論理ではなく、「ともに」の論理で我々は動かなければならないという。「ために」の論理では、一方的に相手あるいは他者の考えや志向などを想定しつつ、その相手の「ため」と称して、管理することを正当化してしまう。このような状況下では、他者は飽くまで管理の対象であり、自ら行動する主体としては認められていない上に、実は管理を行う側の理想を他者に押し付け従わせているに過ぎない。それに対し、「ともに」の論理であれば、お互いが異なった価値を持ち行動する主体的存在であることを認め合い、理想の押し付けや一方的な管理を避けることができる、と金氏は主張するのである。

「公共する」とはシンフォニー

金氏は、このような「ともに」の論理で、多様な価値を持つ諸個人がトランス

「真俗二諦」の論理であって、明治期の宗学者でこれを否定した人はまずいと言ってもよいであろう。しかし、この世俗従属の論理は宗祖の思想には見られないものであるし、また決して「公共」という理念に展開するものではない。したがって従来の教学理解にはそれが欠落していたことは認めざるを得ないというのが、氏の発言の発端であった。

「ヒューマニズム」との関わり方

浄土真宗教学の「公共化」を云々するためには、そこにどうしてもヒューマニ

バーサルに媒介されている状況を、シンフォニー（交響）であるという。それは、異なった人々のポリフォニー（多元的な声）がともに交わり響きあう世界である。このような状況を作り出すことを、金氏は「公共する」と呼び、そしてその一端を浄土真宗が担うことを、期待するという。金氏は、浄土とはこの世における「公共する」ことを通じて形成される連帯性を実現する世界、つまりトランスバーサルでシンフォニックな世界のことを

提言 4

宗門の抱える問題点

本会議では、「公共」「公共する」ということがテーマの一つとなったが、徳永寮頭は宗門が公共化する上での三つの問題点を指摘された。

ズム的な要素を持ち込まざるを得ない。しかし、それは人間中心の思想から離れて、「衆生」という言葉に象徴されるような仏教的ヒューマニズムでなければならぬ。

これについて島藺氏は「近代文明が人間中心であり、人間が自然を支配する」という現代のヒューマニズムの最大の問題点を指摘され、仏教的ヒューマニズムを提唱することに賛同の意を表された。

また、金氏は「クリスチャン・ヒューマニズム」に対して「ブッディスト・ヒューマニズム」とでもいべきものを明らかにしてはどうかと提唱された。

教学の「公共化」のための財産

教学の「公共化」

について、氏は三十七年間にわたって従事してきた聖典の英訳事業、また長年の間教鞭をとってきた京都

指し、それは、阿弥陀という言葉で形容されている、生命のつながりの無限性・複雑性を認識することによって可能になる世界、として解釈すべきであるという。

浄土真宗はそのような世界の確立を目指すべく、国籍・人種・国境・宗教を超えて、開かれた対話を進めていくべきであるのだ。そして、そのためには、原義とは異なるが、「歎異」よりも、むしろ「励異」であるべきであると主張され、発題を締めくくられた。（報告担当・川村）

「公共」思想の欠落

近世になって浄土真宗教学は精緻な学問体系を構築し、それは今も宗学を学ぶ者の大きな拠り処となっている。しかし、これは徳川幕藩体制という世俗権力の支配下において進められたものであつて、明治期に入ってもその権力が明治政府に取って代わられただけである。世俗権力に従属するために用いられたのが

女子大学における宗教教育から学んだ仏教の真理の普遍性と公共性、さらに教団がもつ寺院と門信徒との密接な関係から発展させるべき公共性を強調された。これらはいずれも宗門が社会ひいては世界に展開するための貴重な財産であるが、これまでその意義が認められていたとは言えない。しかし、これをどのように活性化させるかがこれからの宗門の大きな課題となることを強調された。

金氏は、聖典の翻訳事業について、親鸞思想の一つの言語圏に閉じ込めず、他の言語圏の中に共鳴・共振を生み出すものとなる事業であり、そこに「公共哲学」が生まれるとして、その意義を高く評価された。（報告担当・藤丸）